

岐阜県教育ビジョン検討委員会
高校の在り方専門委員会(第4回) 議事要旨

日 時	平成25年8月27日(火) 10:00~12:00
場 所	教育委員会会議室4
出席者	<p><委員> 8名(50音順) 加藤直樹委員(委員長)、高賀敦子委員、嶋崎吉弘委員(副委員長)、 島田亜由美委員、高田大嗣委員、中島潤委員、信田哲彦委員、前谷智香委員</p> <p><県教育委員会> 教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長 他</p>

会議の概要	
1	開会
2	あいさつ
3	協議事項 自立して社会生活を営む基礎的能力の育成 ○ 多様な学習ニーズを持つ生徒への支援 ○ 多文化共生のための教育環境の整備
4	閉会

◆ 意見の要旨

<今までの審議経過の報告について>

※ 事務局から資料1の説明

※ 加藤委員長から委員長提出資料の説明

【加藤委員長】

- 第2次岐阜県教育ビジョン作成に向けて、これまでの3回の審議で出された意見を、「自立力」「共生力」「自己実現力」をキーワードにまとめてみた。ここは直した方がよいか、言い足りなかった部分、あるいは感想等があればご意見をいただきたい。

【信田委員】

- 最近の若者について感じることは、自分についての評価が高いということ。半人前なのに「自分是可以する」という感じで行動する。
- ゲームなどで得られる手近な達成感への逃避が習慣化されている。旧来型の苦勞とか地味さとかを実体験なしで理解しているつもりでいる。
- 今起きているのはプロの軽視。自分のやっていることとプロの仕事を比較することなく、自分は外野席の安全地帯にいて人を批判する立場にあり、決して責任をもって批判される立場、フィールドには降りてこない。「自立」について考えるとき、気を付けなければいけないことのひとつである。

【前谷委員】

- 机上で物事を考えていると、仕事も理解できると安易に思いがち。頭で理解したことで仕事ができることとは違う。色々な体験をして、体で覚えることが必要。体験する機会を与えることが必要。

【島田委員】

- やらなきゃいけないことは分かっている、「こうしたらいいでしょ」と言うけれど、自分ではできない、または、自分でやる勇気がない。頭の中では分かっているけれど、経験からは学びきれていない。本やテレビで知るだけでなく、実際に体験することの積み重ねが必要。

【信田委員】

- インターネットなどで情報を得やすくなっているが、自分を肯定する情報は簡単に探すことができ、そのような情報だけを見るようになってしまう。

【前谷委員】

- 自分はできると思っていたことができなかったり、できないだろうと思っていることでも意外とできたりすることがある。情報が思いの中にあってできる気持ちになるのと、実際にやってみると自分の思いと違うこともある。思い込まないこと。

【中島委員】

- 皆さんの言われる若者の変容は、社会の変化が激しいので、それに敏感に反応したとも考えられる。
- これから何が必要かを考えて作る学習指導要領が10年経った時には社会が変化しており、教育は常にその時代に遅れ、現実とのギャップが生じることになる。教育ビジョンはこれからの5年なので、私たちが考えていることを盛り込み早く実行することができる。
- 知識や技能を貯め込むことから、複雑な課題に協働して対応できることに価値をおく教育への改革は必要。

【高田委員】

- 高校の授業を見たとき、輝いている高校生がいっぱいた。岐阜農林高校の生徒が、学校で学んだことを基にしながら、地域に出て研究し、見事な発表で地域の方々を感動させた。そのような高校生が社会へ出たときに活躍してくれることを期待する。
- どのような体験をさせ、どのようにして社会と関わっていくと自信に繋がるのかを考えていくことが重要。

【高賀委員】

- 高校の家庭科の授業では、ディベートを取り入れて学習している。自分寄りの立場だけでなく、反対の立場でも考えさせ、相手がどのように思うのかを考えさせる経験が重要である。
- 世の中の情報をそのまま信じるのではなく、批判の目を持って見ること、考えることも必要である。

【嶋崎副委員長】

- 何でもできる、自由にやれる、という教育だけでは、過剰な自信だけあり、結果、挫折して道を失う場合もある。ある程度、方向性を示してやることも必要なのではないか。その中で自分なりの考えを実体験の中で見つけていけばよい。

【前谷委員】

- 自分に自信をなくしている子は、地域社会に出て厳しい体験をすると地域の仕事人から指導をもらえたり、1つのことを探求してきた大人と出会えると色々な見方ができ、学力に自信のない子もこの道ならやっていけるという思いをもつ。そこから自分の道に気付く。それは自信につながる。

【加藤委員長】

- 「自立力」だけを考えるのではなく、他者との「共生」の中で経験をさせることによって、「自己実現」に向かい、輝く高校生の姿を見せることができる。そういうサイクルを作っていく必要がある。

<多様な学習ニーズを持つ生徒への支援>

※ 事務局から資料2・3・4・6の説明

【前谷委員】

- 定時制高校というと「夜間」というイメージしかなかった。昼間定時制に通ってくるのはどのような生徒か。

【中島委員】

- 全日制高校の制度には合わないけれど、高校で学びたいという思いを持っている生徒が多い。中学校のときに不登校であったり、人とのコミュニケーションが苦手だったりする生徒もいる。

【信田委員】

- 敗者復活のようなしくみはよい。単位を取り損ねたり、半年間学校へ行けなかったりした人が、それで道が閉ざされてしまうのではなく、再チャレンジできる制度があるのはよい。

【高田委員】

- 華陽フロンティア高校はニーズが高く、充実した高校生活を送っている生徒が多い。中学生も、不登校傾向の生徒も最後まで華陽フロンティア高校を目指して頑張っていた。入学後も充実感をもって勉強をしていると聞いた。
- 学校で多様な授業を準備しようとする、施設面とか教員の数で大変なので、企業や大学、専門学校と連携することを考えてはどうか。
- できるだけ実学的な科目を多くし、幅広く学習できるシステムにしてほしい。

【中島委員】

- 華陽フロンティア高校では、社会に適應する教育に力を入れている。進学者が半数弱、就職者は正規での就職の他、フリーターになる生徒も多い。
- 定時制の高校は、スペシャルニーズの学校である。子どもたちが安心して学ぶことができるように集中的に投資し、夢と希望を広げられるシステムにしてはどうか。
- 定時制や通信制は制度的なメリットがあるので、それらを有効利用して、ベースの部分はしっかりと学びを保障しながら、能力の高い生徒にはグローバルな学習もしていけるように、学校の位置づけをしていくとよい。このようなスペシャルニーズの学校を適正に配置していただきたい。

【嶋崎副委員長】

- 通信制の高校について詳しく教えていただきたい。

【中島委員】

- 定時制高校や通信制高校は学ぶシステムが異なる。全日制高校は朝から6時間の授業を受けるが、三部制の定時制高校では自分の好きな時間帯に授業を組むことができる。通信制高校は長い期間かけてでも、自分のペースで一つずつ単位を取っていく仕組みで学んでいる。
- 華陽フロンティア高校の通信制課程は、レポートの提出率や合格率が非常に高い。高校でしっかり指導されている。
- 定通併修など、様々な制度上のメリットを生かすには、定時制の課程と通信制の課程を1つの高校として、一体化して運営していくとよい。

【加藤委員長】

- 多様な子どもたちに多様な学び方のチャンスを与えることが必要。学び方のいろいろなスタイルに合わせる必要があると、半期での単位認定を可能にするなど、手間がかかるかもしれないが考えていただきたい。

<多文化共生のための教育環境の整備>

※ 事務局から資料5・6の説明、授業の映像

【加藤委員長】

- 外国人生徒の多い高校では、いろいろな母語をもった生徒間で交流したり、互いに教えあったりすることをどの程度しているのか。

【中島委員】

- 前々任校では、日本人の生徒との交流を主にやってきた。放課後活動する「イングリッシュクラブ」には、ほとんどの外国人生徒が入っており、お互い同士や日本人とも一緒に活動し交流している。文化祭では母国を紹介したりしている。放課後に行われる日本語指導もそのクラブを母体にして受けている。

【高田委員】

- 中学校ではこれほど多くの外国人生徒が集まることはないので、通常の学級の中に支援員が入って対応している。
- 外国人生徒が多い高校では、企業と連携して就労体験などもするとよいのではないかと。学校だけではなく、地域・社会・企業を巻き込んでやっていくべき。
- 定時制・通信制でもそうだが、教育活動をバックアップしていくシステムが必要である。

【高賀委員】

- 親が地元の企業に就労しているので、その就労先の企業と連携していったらどうか。

【前谷委員】

- 外国人生徒は、言葉の壁はあるが、ハングリー精神もあり、やる気もある。そうした生徒が、就職した場合、企業が海外に進出するときには、日本のことがよく分かっているのでむしろ活躍してくれると思う。
- 高校改革リーディングプロジェクトの演劇ワークショップの取組が非常によい。言葉が通じなくても外国人も日本人も一緒になって思いを共有して、表現をしていくところがよい。

【中島委員】

- 中学校では外国人生徒に日常会話を中心に教えるが、高校は学力をつけるところ。言葉の壁を取り去ることを中学校と高校で連携してやっていかなければならない。そして、彼らを社会の一員として迎え入れてもらえるようにしていくことが必要である。
- これも一種のスペシャルニーズの学校である。集中的に投資をして、将来の地域社会を支える一人として育ててほしい。

【高賀委員】

- このような学校には、教員の質と人数を手厚く配置していただきたい。

【前谷委員】

- 可児市や美濃加茂市には、地域で応援してくださる人が大勢いる。彼らの力をもっと活用できるように工夫してもよいと思う。

【加藤委員長】

- 授業の方法はもっと工夫できるのではないかと。講義形式の授業にこだわらず、教えたり教えられたりということを取り込んでいったらどうか。

<4回の会議を振り返って>

【高賀委員】

- 今後、多様化している生徒の学びを支えるには、地域社会や学校間、多様な教育機関と連携をとって進めていくことが重要である。学校の中だけで生徒を育てる時代ではなくなっている。

【島田委員】

- 教育が地域や企業とこれほど深く関わりがあることを改めて感じる事ができた。どんな高校でも最終的には地域や社会で生きていける人材をどう育てるかが目標になる。本日のテーマである再チャレンジも含めた学び方の選択肢をたくさん準備し、個性のある子供たちに対応をしていくことで全体の底上げを図っていく必要がある。
- 学校、企業、地域がそれぞれで頑張るのではなく「繋がっていく」ことがキーワード。

【高田委員】

- 学問の追究ができる高校、職業的な専門性を追究できる高校、様々な体験で学んでいく高校など、高校の目的を明確にして選択できるような高校の在り方を考えていけるとよい。

【前谷委員】

- 魅力ある大人と子供たちが出会える機会を増やし、聞いて学ぶだけでなく、体験しながら、一つの課題に取り組み、子ども達からも提案を行えるチャンスを作ることが大切である。色々な考えの大人や子供、そして、外国人との交流も同様だと思う。

【信田委員】

- （委員長の資料にある）「自立」から「共生」を経て「自己実現」に向かう流れは大いに共感できた。特に重要なのは「共生」の部分。「共生」は個人からすると都合の悪い部分もあるし、利益もないように思われるが、見逃すことのできない大切な要素であることを痛感した。
- 成績が良くないとよい就職ができないから勉強させる、という親の教育姿勢が変わるかもしれないという期待が持てた。そのためには企業の姿勢も変わらないといけない。

【中島委員】

- 今までの知識や社会性を養うという高校の基盤に、「体験・連携・グローバル」というキーワードを高等学校で膨らませていくような高等学校の改革となるとよい。高校生は力を持っている。その力を開花させる仕組みが作られるとよい。

【嶋崎副委員長】

- みなさんの意見に共感している。足りないのは経験だが、小中学校では地元と繋がった体験活動があるが、高校生になると地元で活躍できる機会が少ない。地域社会が高校生を利用する仕組みも必要。
- 問題解決能力がつけばどんな社会でも通用する。そんな生徒を育ててほしい。

【加藤委員長】

- この4回の会議で出た意見が、次期ビジョンの中の高校改革の部分に反映されることを願っている。